



杭州に関わる二つのテーマ

大里 浩秋 (事業担当推進者 / 神奈川大学大学院・教授)

初めて杭州に行ったのは1980年夏のことである。この年の春から広州の大学で日本語の教師をしていたので、その大学の夏休みを利用し日本語のできる若手教師のお供付きで出かけた。赴任の数ヶ月前に「陶成章研究」と題する修士論文を書き上げたばかりで、陶成章がリーダーだった光復会関連の資料をいくつか読んでいたことから、資料で知った同会の活動を今度は現地で何らか確認できればと思ったのである。ところで、いくつかの場所を回ってみたものの、当事者たちの活動現場を探す作業よりも彼らの墓の所在を確かめるほうが具体的に興味深いものがあった。彼らが杭州で立ち寄った場所は記録上はいくつもわかっているが、その場所をさらに特定できるほどに記述が詳しくないので、なんとなくそこに近づいたという感じが湧かなかった。この点は、光復会の主要メンバー陶成章、徐錫麟、秋瑾などの故郷である紹興には、それぞれの生家(あるいは実家)が残っているばかりか、会員を訓練し蜂起を準備した大通学校も残り、さらに秋瑾が処刑されたあたりも特定できるとあって、想像力をかき立てるにふさわしい場所がいくつもあるのである。しかし、彼らが志半ばでいずれも非業の死を遂げる(徐と秋は1907年の蜂起失敗で逮捕処刑され、陶は辛亥革命後まもなく内部抗争で暗殺された)や、埋葬されたのは杭州の西湖畔であった。そこで、私の西湖に対する第一印象は、きれいだが、より、周りに光復会員の墓がいくつもあるところ、というものだったが、墓所の類なら特定できるのではと踏んで出かけてみたものの、本人の生前の希望があって西泠橋の近くに埋めたはずの秋瑾の墓は跡形なく、その近くに造っ

たという陶成章の墓も、少し離れて中山公園内に建てたという徐錫麟の墓も、それと信じられる土台石のかけらも見つけることができなかった。1960年代半ばに起こった文化大革命の混乱の中、各地で古い建造物を破壊する動きがあったとは聞いていたし、この時杭州の後に行った紹興で陶成章のお孫さんに会って陶の墓が壊されようとして間髪遺骨は掘り起こしてどこそこの山中に埋葬したと聞いて、彼らの墓がなくなっていることに格別驚くことはなかったけれども、本人には預かり知らぬことながら、死後60年近く経ってなお子孫が心を痛める場面があるような歴史の展開は一体何なんだと考えさせられた。

その後80年代後半だったか、秋瑾の墓が元の場所の近くに石膏の立像と共に新たに造られ、陶成章や徐錫麟の墓も仲間の光復会員の墓と一緒にまとめて龍井茶の畑が点在する丘の中腹に造られたと聞き、もちろん見に行っていたが、それらから受ける印象は薄くて、湖畔の叢を石のかけらの一つでもないものかと張り詰めた思いで行きつ



写真の上に付した文字は「中国女性で国のために血を流した最初の人」の意、下の文字中「鑑湖」は紹興にある湖の名。『香艷雑誌』第三期所収。

戻りつした時の光景には比べるべくもなかった。もう一つの後日談、2年前に同僚の孫安石さんがある雑誌に載っていたのでといって1枚のコピーを渡してくれた(前ページの写真)ここに写っているのは西湖第一代の秋瑾の墓で、それまで私は見たことがなかった。多数の弁髪、帽子姿にはさまれて処刑の翌1908年にできたばかりの墓をぼんやりながら確認することができ、こんもりした塚の上に花輪が置かれているのも見て取れる。そして、写っていない手前には西湖が迫っており、背後の建物は、私の推測に間違いがなければ、秋瑾の時にも陶成章の時にも追悼会を開いた鳳林寺の一部である(ここにはのち杭州飯店が建ち、今はシャングリラホテルになっている)とここで秋瑾の墓は、できた年の暮れには清朝側の手で壊され、そのため夫の故郷湖南に移葬し、中華民国元年にまた遺骨が杭州に運ばれ、第二代の墓が第一代と同じ場所に再建された(何年かは未確認)が、それがまた文革で壊されたというわけである。なお、翌81年にも杭州、紹興に出かけて自己満足の調査を続けたが、その後数年で彼らの伝記や年譜を相次いで書けたのは、あるいは、現地調査で増幅した彼らに対する思い入れがエネルギーになったためかもしれないと感じている。

次に、杭州日本租界に関する話である。90年代初めに華僑関係の資料探して長崎県立図書館を訪ねた際、日中戦争時の1941~44年、杭州に置かれた特務機関に勤務する日本人が編集発行した『浙江文化研究』という月刊誌があるのを見つけた。読んでみると、「凡ゆる面よりする浙江省研究」(「創刊の辞」)を目ざして、浙江省とその省都杭州の歴史や文化、さらに現実の社会や経済の実態調査に関する文章がごっちゃんに載っていて、占領した地域(といて、浙江全域を実効支配できていたわけではない)における文化面からの支配の実態がうかがえると共に、日本人には杭州大好き人間が多いことを実感させる内容で面白かった(拙稿「『浙江文化研究』初探」、『中国研究月報』1994、6参照)そしてこの雑誌中に、日本領事館が1896年に設置されて以来の在留日本人の様々なエピソードを紹介している一文(河合宣「杭州居留民誌稿抄」)があり、そこに日本人商人と中国人住民との騒擾事件が取り上げられていたのに興味を覚えた。詳しく知りたと思って外交史料館に行くと、うまい具合に「明治43年清国杭州暴動並城内居住日本人撤退一件」と題する文書が見つかった。これに拠ると、事件は1910(明治43)年3月24日夜に杭州城内の大井巷(巷は横丁の意)で起った。そこで日本人が経営する煎餅屋兼遊技場に中国人客が来

て、空気銃射撃を的的に命中した、しないで言い争いになり(1発命中したら15枚の煎餅がもらえる)拳句にもう帰れと追い出そうとする店の主人ともっとやらせろという客、さらには続々と集まってくる野次馬との間で小競り合いとなり、主人が身の危険を避けて警察に保護されるや、大勢の野次馬が日本人はけしからんといって店を壊し始め、さらに近くに出している10軒程の他の日本人の店にも押しかけて殴ったり商品を壊したりして騒然とした状況になった末に、軍隊が出動してようやく鎮まった、というものである。ここまで読むと、たわいのない喧嘩が発端で日本人憎しの排外暴動を起こした中国人の方が悪いということになってしまうが、その後の展開を見るとそうとばかりはいえないことになる。事後処理の外交交渉において、日本の外務省は店の破壊と暴行負傷に対する謝罪と弁償を要求したのに対し、杭州当局は、この事件はそもそも城内での営業を禁止している外国人の店がその規則を無視して開いていることから起こったことであるから、全ての責任は日本側にあるとして真っ向から対立し、それに呼応するかのごとく住民中のインテリ層による日本人の城内営業禁止を求める集会が開かれているのである。そして、こういう動きから、上記の野次馬による排外的色彩濃厚な日本人の店に対する襲撃も、その背景には確かにその10数年前に日本が日清戦争の勝利の勢いで杭州を含む四つの租界を開かせたことへの怒りがあり、さらには、日本が租界のみでの営業を約束したにもかかわらず、野原のまま開発が一向に進まない租界の現状から城内での営業を止むなしとして先の約束を反故にしつつあったことへの反発があったのだと気づかされる。結局日中間の交渉は落ち着く所で収まった感があり、中国側は弁償金を払い、日本人商人は城内から立ち退くことになったが、日本政府は立ち退きは商人の身の危険を避ける為の一時的撤退であって、中国側主張を認めたものではないと強弁した為、その後に対立の目を残すことになった。こうして、以上に述べたような関心からまた何度か杭州を訪ねることになり、昔ながらのたたずまいを残す大井巷や荒れ野原でありながらまもなく高層住宅が建てられようとしている旧日本租界に足を運んだが、紙面が尽きてしまった。この辺の事情については別の機会にまとめてお目につけたいと思う。なお、関連したものとして拙稿「杭州大井巷事件の顛末」(神奈川大学人文学研究所『日中文化論集』)と「杭州日本租界について」(神奈川大学『人文研究』No.149)を参照していただければ幸いである。